

体験実習における学習の質を支えるもの

——国語教育講座における生成型教育実習の試み

○戸田 功 薄井 俊二 村上 謙

はじめに

平成十九年度から、埼玉大学教育学部では、学校フィールドスタディという科目が開設され、教員養成における実習をめぐる環境が大きく変わることになった。それまでは教員を志す学生が現場で経験を積みたいと思っても門戸を開いてくれる学校は限られていたのであるが、制度面の整備が進み、学生が希望しさえすればほとんどの学校にボランティア要員として配属させてもらえるようになったのである。この変化が教員養成上何をもたらすかは長期的に見ておく必要があると考えるが、少なくとも教育現場の敷居が低くなったことは、意欲ある学生たちにとって喜ばしいことであろう。

教育学部で学ぶ学生が教育実習とは別に学校現場に立ち入ることが許されるなどということは、十年程前には大事件であった。ある地区の教育長の英断により、教育実習を終えた学生に限りボランティアとして学校現場に手伝いに行けるという話題

が一大ニュースとなっていた当時からすると、隔日の感がある。とはいっても、教育界は本来保守的なものであるから、このような急激な制度的変化があつたとしても、学校現場の意識にも急激な変化があつたと考えるのは早計であろう。当時、その地区の小学校の教員を親に持つ学生から、「大学生は足手まといなだけ、ぜんぜん使い物にならないと先生たちの間で評判になつているそうです」と教えてもらったことがある。このような評判は、現在でもまた、ひそかに、かつ大規模に進んでいることであろう。そのような状況下、学生はどのような経験を積むことになるのであろうか。ますます忙しくなっている学校現場で「使い物にならない」学生に向かい合つて本当に意味のある経験ができるように配慮してくれる教員に出会う可能性は、現在、一体どのくらいあるのだろうか。間にあるハードルがかつてないほど低くなつた現在、学校現場に行きさえすればお互いに得るものがあると考えること自体、非現実的なものになり

つつあるのではないだろうか。

さて、埼玉大学教育学部国語教育講座では、平成十一年度のカリキュラムから、教職入門等の一年次前期から連続的に履修する科目を使って、一人一人を基本的単位とする活動中心の授業を講座教員によるティーム・ティーチングによって行っている。そこでは、学生が自己の資質や希望と向かい合いつつ自分に必要な学習を自覚的に進めることが出来るよう、様々なトピックや形態を工夫しながら、学生の自己学習のための便宜を図って来た。その中から自然発生的に成立し、展開してきたものの一つに「体験実習」がある。これは、新しいカリキュラムの開始という制度面での変化があつて始めて生まれたものではないが、結果的にはあらかじめ仕組んだものではない自然発生的な学習の場を、学生自身が切り開くことで自分たちにとって意味のある経験を得るといふ、注目すべき展開を見るに至ったユニークな実習形態であるという点において、また、学校現場の門戸が狭く学生の出入りに今よりはるかに厳しい目が注がれていたにもかかわらず、学校からも一定の評価を得ながら実習の形態を発展させることが出来たという点において、注目に値する成果を上げたと言ふ事が出来る。したがって、そこにおける学習の質が何によって支えられていたのかについて考察することは、教員を志す学生が日常的に学校現場で経験を積む機会を得ることが出来るようになった現在、よりいっそう必要なことであろう。

そこで、体験実習が成立するに至った経緯と、そこにおける学生たちの学びの実質を、カリキュラム等の制度面の特質やそ

こから生成した体験実習の形態の推移、さらには学生たちが残した報告書の内容を見ることによって振り返り、その上で、体験実習においてその学習の質がどのように支えられていたのかについて考察したい。

第一章 体験実習の成立と展開

第一節 カリキュラムにおける位置づけと体験実習の成立

平成十一年度から始まったカリキュラムにおいて、国語教育講座で開設する国語専修生向けの一・二年次の授業の内、連続する半期四科目、教職入門と国語教育基礎研究A・Cを特定の担当者を限定せず、講座全体で受け持つ科目として、カリキュラム全体を支えつつ貫くような役割を持たせることとした。その基本的な進め方としては、複数担当制(TTまたは全員協力体制)の元に、学生一人ひとりを基本単位としてグループやクラス単位での活動を基本的形態として、トピック学習や外部講師によるワークショップ等、多様で刺激的な内容を企画し提供する、というものであった。平成十一・十二年度は、試みに四科目全てを全員で受け持ちながら、企画した内容に基づきそれぞれが担当するグループの学生の学習コンサルティングを行った。十三年度からは、それぞれ二・三人で企画を担当することにし、他のスタッフは必要に応じて協力するという形態になった。国語教育講座におけるこの試みは、おそらく大学教育史上画期的な形態と内実をそこに認めることが出来るものであり、それは、学生にとつての刺激ばかりでなく、我々大学教員にとつても非常に学ぶべき物があつた。今回の報告は、そこから派

生した部分が主になっている。このカリキュラムにおける試みからは、多くの成果と課題を得ることが出来た。が、それについての報告は、他日を期したい。

さて、平成十三年度前期国語専修一年次生が履修した教職入門が、今回の体験実習の始まりと密接に関係している。そこで、この年の教職入門のあらましをまず見てみよう。

教職入門の内容としては、この年のテーマは「子ども」であった。例年通り、最初と最後に担当教官との個人面談を行うこととなっており、成績は毎回提出する学習の記録とその他の活動の成果、最後に記入する振り返りカードに基づいて面談で決めることとしてあった。さて、小中学校の教員になるために自覚的になっていなければならないことの一つに、子どもに対する自分の向き合い方がある。そこで、実際の子どもに出会うことを通して、その実態を知るとともに、自分がどのようにして彼らと向き合ったらいいのか、そのことについて考える出発点を提供して見たいと考えた。はじめに、「ゴールデンウィークをはさんで、「街の子どもウォッチング」というグループ活動を行った。それは、学生一人ひとりが、自分の周りで見かけた子どもを観察し、記録を取ってくる。それを持ち寄り、彼らが一体どのようなことを感じ、どんなことをしたいと思っているのかについて、グループでディスカッションするという活動である。それによって、無意味に見えていたり、ステレオタイプに決め付けていたものが、ちがう風に見えてきたり、また、自分がどのように感じることを自体の意味についても、立ち止まって考えたりするきっかけが得られることで、自分がどのように子ども

と向き合うのかについてより自覚的になることを目指したのである。その後、比較的良心的な取組みを行っている東京都のある公立幼稚園にお願いして、保育の現場で実際に子どもと交流させて頂き、その後の研究協議会で、そこでの保育の意図を、その日起こった具体的な出来事をめぐって先生方から身近に話を聞くことで、子どもと関わる仕事がどういうものであるか、内側から理解するための実習を、一日かけて行った。ところで、そこに大学側から同行し参観していた戸田が、学生の取組の姿勢にある違和感を抱いたことから、その後の実習の報告会の予定を変更、早めに切り上げて、この種の実習や大学での学習に対する取組の姿勢をめぐっての臨時の話し合いを開いた。急いだ理由の一つとしては、その後に準備してあった中学校での参観実習が意味を持たなくなることを恐れたのである。

結果的に言えば、そのときいったん決裂し予定外の混乱をもたらした話し合いが、体験実習の生まれたきっかけの一つになった。話し合いには、薄井、飯泉らの大学教官が参加し、何とか決着させることが出来たのであるが、戸田が示した基本的なメッセージは彼らなりに受け止められ、実習は予定通り行われることになった。なお、そのメッセージの内容については、後の章で述べることにする。

参観実習の具体的な内容については、中学校において子どもと関わる具体的な現場に触れることが出来れば、どのようなものであっても構わないので、その日の学校の事情でどういう場面にどのようなように参加することになっても、むしろ学校側の事情に合わせるくらいで構わないので、ありのままの現場に教師側

の立場から立ち合わせてくれるようお願いしてあった。引き受けてくれることになっていたのは、その前年まで国語教育講座に研修に来ていたのが縁で、当時相談する機会を比較的多く持つことが出来ていた、新座市立第五中学校の坂口智教諭である。学生の状態とそれまでのいきさつを聞いた坂口教諭（当時）は、それなら見学だけじゃなく、思い切って授業に参加させてしまおうと提案してくれ、そのためには三日に分けて実習しようということになった。この方式は、その後「泥縄」方式という、そのときの状況を見ながらまずは目的の内実を得ることを最優先にプランの変更をするというスタイルのごく初期の例の一つである。我々大学側からの付き添いはあるものの、基本的には中学校側の教育実践の一環に加えてもらうことで、いわば実践の場いきなり出合わせようとしたのであった。ここで、見るべきは学生側の変化であった。遅まきながら幼稚園のときとは打って変わった真剣な姿勢になり、やっと自分たちがお客さんではないのだという自覚が現れたように感じられた。三日間のそれぞれの実習は、坂口先生から示されるその日の実情に応じた当事者性に富む新鮮な課題によって、それぞれ違う内実を持って体験されることとなったのであるが、そこでの彼らの手応え（多くは失敗をともなうて感じられたようであるが）は、このような彼らの中に生まれた姿勢によるところが大きく働いているように思われる。この、学習の手応えを成り立たせる姿勢についても、後述することとする。さて、それぞれの体験を報告しあった後で報告書をまとめ、幼稚園と中学校への挨拶と礼状等を送り、この年の教職入門は一応終了した。その後、就

学前、就学中の子ども（幼稚園児と中学生）と出会ってきたので、放課後の子ども（小学生）にも出会えるように、オプションとして、希望者には学童クラブに造詣が深い薄井を窓口にして、学童クラブでも実習できるよう便宜を図った。この学童クラブの実習については、別の機会に報告することにする。なお、これらは全て初めてのことであるので、大学事務の本部に对人的傷害保険等についての確認を行ったところ、カリキュラムの一貫として行っているものであれば大学で入っている介護体験用の保険が適用できるとの答えを受けている。そのことも、先方に了解していただける条件面での理由の一つになったと考えられる。

正規の授業としては、これで終わったはずであった。けれども、これで終わったわけではなかったことは、半年後に判明した。俄然意欲的になった学生たちは、教職入門で得たメッセージと坂口教諭の様々な配慮ある助言等に勇気付けられ、その後也有志で新座五中の研究発表の見学に行ったりしていたが、その折、坂口教諭に、教職入門でのような実習を続けてさせてもらえないかと相談したのである。これは、その後、「言ってみるもんだ」方式と呼ばれ、様々な形態の体験実習が展開するに至った最初の例である。

坂口教諭は直ちに戸田に相談、戸田は大学本部に確認したところ、正規のカリキュラムから派生したものであっても責任者がいて位置づけられたものであれば保険の対象となるとの回答を得、一方坂口教諭は第五中学校側の了承を得、さらに、国語教育講座開設の科目中戸田が開設する国語科指導法A・Cの授

業のオプションとするということで、発展的に実習を継続するということになった。

ところで、この、体験実習の成立に至る過程で、引き受け側の坂口教諭の果たした役割は、注目するに値するであろう。坂口教諭は中学校側を説得するに当り、教職を志す大学生のためにといいのではなく、中学校の生徒にとって、大学生が来てくれることに教育上の意味がある。すなわち、子どものためになるものなのであって、子どものためにと意欲して来てくれる学生の協力はむしろ中学校のためになるのだと主張されたように、当日迎えて下さった校長先生からは、歓迎に辞とともに感謝と期待の言葉が学生に述べられたのであった。その後も、受け入れる中学校側からは、通常見られる認識を覆すような驚くべき提案が坂口教諭を通じて伝えられることが多々あり、この種の創見的な現場的打開があつて初めて、最終的にこの企画の内実としての学習の質を獲得することが出来たと考えることが出来る。この点についても、前二者とともに後で改めて述べることにする。

第二節 体験実習の展開

明けて平成十四年、二年生となった学生たちは、九月の夏休み期間中、本人が希望する限りの時間、新座第五中学校で実習の続きを行うことができるようになった。けれども、この実習の現場は、学生から聞いた言葉で言えば、「思いつ切り、アウェー」な状態だったようである。

教育実習のようにはあらかじめやるべきことが決まってい

実習であるため、教員側と学生側の双方からの主体的な発信と受信がないとうまく行かないであろうことは、十分想像できる。けれども、もともと存在しないところに信頼と協力の関係を作っていく力こそは、これからの教員に最も必要な資質の一つであろう。その意味では、その時学生にはその力を身につけるめつたにないチャンスが与えられていたと言うことも出来るであろう。

チャンスは色々な形で降りかかってきた。自分の役割がはじめから与えられていないため、自分はどうのように行動すればいいのか、その前に、何をさせてもらえるのか、また、そもそも自分は何をしたいと思っているのか、さらには今、目の前で気になる行動をしている生徒に対してどう関わったらいいのか、等々、今すぐに自分から何かを発信しなければならないはずの場面が次々にやって来る。やつとなれたと思つたころ、逆にお前は一体何をしに来たんだと怒鳴られたり、自分が自信を持つて行動した何気ない振る舞いから、そのクラスの担任に教室への出入りを禁止されるほど叱られたり、ある教諭の授業を見学させてもらうことをお願いするきっかけを得るために、坂口教諭のアドバイスでその教諭の授業中廊下を掃除しながらさりげなく覗いてみることで、やつと口を利いてもらえたり、自分が少しでも空いている時に何をどうすればいいかわからないので、空き時間中の教員に片端からインタビューを試みる者がいるかと思うと、モデルとなる教員の身のこなし方を真似て色々やってみる者がいる等、それぞれが山のような失敗と試行錯誤を経験することとなったのである。従つて、その姿は、何か事

件が起こるたびに遅い時間までミーティングを開いてくれたり、それぞれの課題や悩みにしっかりと対応してくれた坂口教諭を中心に、様々な場面で救いの手を出してくれた先生方によるフォローもあって、外からは何とかプラスマイナスゼロに落ち着いたといった程度の印象であつたらしい。その評価が逆転したのは、終盤にあつた、体育祭での学生たちの大活躍によるのであるが、ここには実は今後に続けたいという学生たちの希望を受けて、何とか彼らの印象を良くさせてやろうという、坂口教諭による様々な配慮と指導も大きく与っている。その結果、初めての体験実習は、その大きな学習の内実とその内実を損なわないだけの十分な評判とを得て、おおよそ無事に終わったのである。

大学側としては、その後、実習報告書を作成し反省会を開いたところ、子どもを叱るときやトラブルへの対応をめぐってかなり本質的な話し合いになったり、教職についてからも考えを深めていかなければならないような話題が多く出され、この実習において彼らが学んだことの大きさが十分窺われた。

ところで、その後も、体験実習は学生の希望に対応する形で徐々にその形態を進化させながら展開していくこととなった。その同じ年度では、体験実習は二月中旬から始まる大学の春休みに行われた。このときは、期末に向けての様々な準備やテニスコート跡地に父兄らとともに畑を開墾する等、また新しい経験をすることが出来た。次の年、新たな二年次生だけでなく、一年次生も九月と二・三月の体験実習に合流することができるようになった。なお、すべての体験実習は、どの入学年次生に

おいても、教職入門における実習体験を出発点にしており、また、それぞれの年度におけるこれらの実習体験は幼稚園ばかりでなく後には小学校が加わったり、また、その内容も、手弁当持参であつたり給食指導に加わったり、また、思いもよらないような裏方の準備活動など、毎年の新入生による初めての試みが必要入るようにすることで、毎年新鮮な状態を保つよう工夫していた。ところでこの年、第一期を切り開いた3年次生は、教職入門以来関わってきた中学生の卒業を始めて経験した。また、この年、東京都の江東区立東砂小学校（永岡幸夫校長）の協力の下、新たに小学校での体験実習が始まった。一方、五中では、十・十一月にそれぞれ一週間ずつ、四週間にわたるプレ体験実習が、教職入門における一日実習の続編として開始された。その後、時代の変化とともに協力してくれる小学校も増えて行ったが、基本的には五中と東砂小に継続して出かけながら、他の学校も色々経験してみるという形態が主流となった。その二校は、学生にある種の手応えというか、教育活動と一緒に参加し、責任の一端を引き受けて行動することの喜びを、彼らなりに感じさせてくれるところに魅力があつたと推察される。大学側の窓口であつた戸田は、学校行事等その他で臨時に出かけられるよう、彼らから頻繁に仲介または手続きの相談を受けたものである。さて、その後は、学校を取り巻く状況も徐々にではあるがいつそう変わり、現在では意欲的な学生に対して大学側が仲介に苦勞することはほとんどなくなり、意欲に応じて学生はほとんどどのような形態でも実習が可能になったといつても過言ではないだろう。その反面、アルバイトをする時間を

ぎりぎりに削って、交通費等自腹を切りながらも自分のために経験を積みに出かけていく学生に対して、受け入れ先では、当たり前になってきたせい、それとも忙しくなったせい、彼らの欠点をフォローしながら、意欲を生かしてもらえるような場面は却って少なくなつたようである。学生のほうも以前より緊張感が持ちにくくなつても来た。また、学生に高い意欲が見られる場合であっても、その意欲が空回りし、結果としてお互いによい結果を出せないでいると思われるケースも少しずつ目に付くようになって来た。

では、せっかくの学校現場での経験が出来る機会を活かし、そこでの学習の質を高く維持するためには何が必要なのであるか。そのためには、そこでの学習の質が何によって支えられてきたのかを明らかにする必要があるだろう。そこで次に、学生が自ら希望することでもまだ困難な時代に成立した体験実習において、学生たちが得ていた学習の内実はどうなものだったのかを確認した上で、それを支えるものについて考えることとしたい。

第二章 体験実習における学習の内実——学生の記録から

平成二十年一月現在、体験実習関係の報告書は、全部で二十五冊を数える。その内訳は、教職入門における『小・中学校一日体験実習報告書』ⅠⅤⅦと『小学校体験学習報告書』Ⅰ、後期授業期間中に教職入門における一日実習の続きとして行われた『中学校プレ体験実習報告書』ⅠⅤ、そして、夏期及び春期休業中に行われた『小・中学校参加体験実習報告書』ⅠⅤ

XI、である。全体では約二千五百ページ、四百字詰め原稿用紙換算で一万枚の分量を延べ千二百五十人が書いたことになる。その一冊一冊からは、それぞれの特色ある実習の一端を窺うことが出来る。どの頁からでも、興味深い経験が見られるのであるが、ここでは先にも紹介した第一期生が残した報告書から、その学びの内実がどのようなものであったか、そのおおよそを見てみよう。

まず、体験実習に臨む基本的態度から見てみよう。体験実習は、教職入門から発展的に展開するものであり、そこでの全ての取組みの姿勢は、教職入門を貫くモットーである、教職という世界に出会うための姿勢としての、失敗を恐れず自分を出す勇氣、すなわち「失敗する勇氣」と、それによって可能になる状態としての「脱お客」という二つの言葉に集約することが出来るであろう。これは大学入学時から大学生として自覚的に学習することが出来るよう、それまで要求されていた学習の姿勢との違いを明確に表現したものであるが、それを実際に身につける機会はいらない。そこで、あえて意識してその姿勢でのぞむ以外にない場面に自分をおくことが必要になる。体験実習では、学校の教育活動の一端に実際に加えていただくために学校にいるという以外は、あらかじめ何も決めていないので、子どもはどう関わるかということやどんな仕事をするのかということ、いや、それ以前に、どのように自分の身を置くのかということから、自分で何とかしなければ何も始まらないので、いやでも自分を出さざるを得ない状況にあるということが出来る。そのような状況で、あるものは着実に自分の出し方を身に

つけ、又、あるものはある時突然それに目覚めるといった仕方
で、それぞれの「間違える勇氣」を発揮して「脱お客」を果た
して行ったようである。以下、その中から三例を紹介する。

のだと思う。(1)

【A】新座五中で、最初に学んだこと、またこの体験学習の醍
醐味とも言えるのが、「仕事を探すこと」である。この体験実
習中、毎日、自分の課題として設定していたのも、仕事を、自
分が出来ることを探すことであつた。分からないから何もしな
くても良い、指示を待てば良いという甘い気持ちだが、私のどこ
かにあつたことを自覚するきっかけにもなつた。体験実習の最
初は、気持ちばかり先走り、何をして良いのか、これからの流
れがなかなか掴めず、フラフラと行ったり来たりするだけで、
結局何もできなかったと後悔する日も多かつた。自分から動く
ことの大切さを感じたのもこの時期であつた。しかし、この気
持ちを意識し続けることで、先生方からの指示を待つだけでな
く、自分から動こう、今は何をするべきなのかということをも、
自然と自分の中で問うようになってきたのは確かであり、私の
中の大きな変化であつたと感じている。この自問を何度も、繰
り返すことで、だんだんと意識しなくとも、身体が反応するよ
うになって来たとも感じている。仕事に対してハングリーな気
持ち、姿勢を持つことで、体験実習の内容は大きく変わったと
感じている。やはり、お客様のような立場で言われたことだけ
をやっている、受身の姿勢と比べ、常にどうしようか、どうす
べきなのかを考えて行動しようとする気持ちは、フットワーク
を軽くしてくれて、毎日を楽しく充実したものに変わってくれた

【B】私が行った授業の反省会のことだつた。…中略…「こ
の実習で何をしに来ているのか分からない」「これなら総合学
習の時間に学区内の商店に勤労体験をしに行つた中学生の方が
マシだ」「環境に慣れ始めてしまつてダレているのではないか」
などの厳しいお言葉を頂き、その一つ一つが図星であつたこと
はショックだつた。自分たちは「脱お客様」「丁稚奉公」など
という言葉掲げて新座五中に行つたはずだつたのに実際には
「お客様」扱いであつたことに気付いた。…中略…A先生はそ
のとき「このままだといい子達だつたね、いい学校だつたね、
で実習が終わる」と警告してくださつた。まさにその通りだつ
たと思う。そうしてはいけない、残つた一週間で最大限の成果
を挙げたい。そう思った。後半一週間は体育祭開催で忙しい
日々ではあつたが一人になる場面でも動き回り、色々なことを
学べた。この経験はこの実習で得たもつとも大きなものの一つ
であつた。初志貫徹だなんて当たり前のことができなかった自
分への反省と、その後気持ちを入れ替えて行動し、得たものは
決して忘れない。(2)

【C】「脱お客」とは戸田先生の名言であるがその意味は、お
客様として用意されたプランに乗っかるだけではなく、自分なり
に主体的にその企画に関わり、自分で自分の経験を引き出しな
さいというものだと僕は理解している。僕が真に脱お客を果た
したのは、二度目の体験実習となる二年生の冬だつた。そのと

き僕は骨折している生徒についていた。ある時、学年で体育館に集合した際に、多くの生徒は体育館に集まったものの何をすればいいかわからずに、並ぶこともなく騒然としているということがあった。僕は骨折した生徒についていればいいという意識でいたため、その騒然とした生徒たちをただ傍観し、事態の推移を見守っていた。その時、坂口先生から「こういうときのために君がいるんだ」と叱られたのである。…中略…そのときの自分の気持ちは、「生徒たちを並ばせるのは先生方の仕事であり、自分はこの（骨折している）生徒の面倒を見ていればいい」というものであったと思う。多くの生徒たちは体育館に集まったものの、どう並べばいいのか指示を待っていたのだろう。自分はそれに気づくことができず、どう並ぶのかという指示が出るのを待ってしまったのだ。これでは生徒と同じ場所に立ってしまったている。生徒たちは指示や指標を示してやることで自分が何をなすべきかを簡単に理解し、行動してくれる。僕がなすべきことは、先生方と生徒の間をつなぐことなのだ。先生方が全体に向かって指示を出していれば、その指示を末端にまで伝えて回ることが僕の仕事だと思った。まっすぐ並ぶよう指示があれば、先頭に立って手をあげてやれば、生徒は自分を指標に並びやすくなる。おしゃべりに夢中で指示に気づいていない生徒がいれば、そこまで走っていった指示を伝えるなり、指示を聞くよう指導するなりという、小回りを利かせるのが僕の仕事なのだ。(3)

三者とも、この実習の基本姿勢について理解した上で参加し

たのであるが、その理解は、自分から何かを具体的に掴み取ることによって始めて、自分自身のものになって行ったようである。この、自分から始まる学びの姿勢が獲得されることこそが、体験実習における学びの内実の一つの特徴であろう。

次に、教職入門以来の体験実習の基本的な目的である、教育の現場、すなわち子どもたちのために働く現場で、そのスタッフの一員に加えていただくことで、実際の子どもに触れるとともに教師の仕事にも触れ、そこにおける自分なりの課題を見つけるという課題について見てみよう。これは、教育という仕事、子どもと触れ合いながら、自分のやっていることがその子どもにとってどういう意味を持つのかを問いながら、その実現の道を探りつつ切り開くという、きわめて具体的かつ個性的な力を必要とすることから、実際に子どもと関わりながらその子どものために必要な道を切り開いている教師たちの具体的な姿に触れることで、自分はどのようにその個性を作っていたら良いかという課題意識を持つということである。

この点に関しても、それぞれが個性的な教師たちとの出会いを経験し、また、何よりも自分もまた子どもたちと触れ合い、自分なりにその最善を探りながら試行錯誤するという経験を通して、教師としての自分らしい個性をどう作っていくかという課題意識を持つことができた姿を確認することができる。以下、二例を紹介する。

〔D〕 私が今回一番悩んだことは、生徒との距離である。今回は一応「教師」という立場で行ったのだから、友達のようにな

り過ぎてでもいいけない。生徒から遠過ぎてでもいいけない。どのくらいの距離が、生徒にとってベストなのが全く分からなかった。私の理想の距離は、「生徒にとって親しみやすく、気兼ねなく話せ、けれど威厳があり、しっかりと支えられる」距離だ。しかし、親密と威厳の関係がとても難しい。今回は少し生徒に馴染み過ぎた。その代わり、本音も覗けたが、実際教師になった時、この距離でいいのだろうかと考えると、良くないように思う。近すぎるのだ。支えきれず、一緒に倒れてしまう距離なのである。今回の期間中に最適な距離を見つけることはできなかった。けれど今まで理想に過ぎず、実際どれくらいなのか意識できていなかった距離が、今回の経験を通して少し見えた気がする。また現場に臨んだ際、試行錯誤しながらでも、最適な距離を模索していきたい。(4)

〔E〕生徒には一人一人はつきりとした個性があった。「今に子は個性がない」という言葉を良く聞くが、一緒に生活を送ってみると似ているようでもみんなどこか違っているのである。教室にあふれているこの一つ一つの個性が活躍できる場を与えることは教師にとって重要な仕事のひとつとなるのではないだろうか。同じ生徒の同じ個性であっても教師によってその受け取り方は違うであろう。それは、教師にも個性があるからではないだろうか。…中略…私を担当して下さったB先生もやはり自分だけのオーラを持っていらっしやったように思う。先生のクラス的一年三組は「うるさい」と形容されることが多いクラスであつたが、どの生徒もとても楽しそうに学校生活を送っている

ように見えた。…中略…先生と生徒との間には、先生にしか築けない種類の「信頼関係」が存在していたように思う。「自分らしさ」や「自分だけのオーラ」というのは、何年も教師を続け、色々な経験をし、生徒と実際に関わりながら身につくものなのである。私は当初、生徒に何か言われるのが怖くて生徒と距離をとってしまった。しかし、それでは、「自分らしさ」など身につくはずはないのである。そのことに気づくことができたとき私は初めて、自分のコンプレックスは同時に「自分らしさ」となり得るのだと考えることができた。(5)

ここに紹介した二例のように、子どもたちと実際触れ合う中で、教師として彼らと関わるための自分なりの課題意識を深めていく姿は、全ての学生に共通に見ることができるとであった。また、学生を引き受けて自分の責任の下に使ってくださった先生の仕事ぶりに触れることも、子どもと関わる関わり方以外にも子どもをとりまく状況を変化させるような様々な人的及び物的環境に関わる工夫をイメージするための直接的な刺激になっているようであった。そして、この引き受けてくれる教師たちの下で、様々な失敗を補ってもらいながら、子どもたちにとって何が大切かを問いながらそれを子どもたちとともに実現する喜びをとものにできることこそが、体験実習における最も深く、他に代えがたい学びの内実であると考えることができた。

第一期から体験実習に率先して参加した学生の一人は、四年間に渡るその経験を振り返って、次のようにまとめている。

「F」 「教職入門」での一日体験実習で坂口先生と出会ったときのことは今でも忘れられない。坂口先生が担任するクラスでの学活の授業。生徒の各班に学生が二、三人ずつ入り、話し合いを進めるといふ授業内容だった。前述の通り、ただがむしやりに生徒の中に入っていた私は、坂口先生がその時どのような動いていらつしやるのかも分からなかったし意識もできていなかったのだが、午後の講話の際、その授業での私の動きについて声をかけて下さった時に、その視野の広さと観察眼の鋭さに驚いた。その時に私がどのように生徒と接しようとしていたか、生徒の反応はどうだったのか、何か私の心のうちまでも見透かしたかのような指摘と、私への声のかけ方で、坂口先生の生徒への接し方すらも垣間見ることができ、私は非常に興味を持った。その魅力が同時に新座五中への魅力に繋がっていき、その後の実習へと繋がったのである。今改めて考えてみると、何度となく繰り返したこの五中実習で、毎回新しい課題や学び、発見を坂口先生は用意してくださっていた。また、この実習自体を運営する上での先生方や学生との調整役をし、我々学生の面倒を全て引き受けてくださり、様々な技術、知識、環境を私たちに提供してくださった。…中略…私は毎回の実習を通じて、坂口先生のそういった姿を見ることで、新しい教師の姿とその仕事ぶりを盗むことができるのではないかと思ひ始めた。そしてこの考えから、私は回を追うごとに何とかして学生のまとめ役や先生方との調整役としての一役を担えないかと坂口先生に付いて回り、その仕事を学ばせていただいた。この調整役としての役割は私にとって非常に大きなもので、先生方や学生をは

じめ、様々な方々との関わりの中で物事を進めていくことを学んだと同時に、それをされている坂口先生の凄さと学校現場での重要性に改めて気付かされた。…中略…第一回の長期実習では当時の三年生のクラスで二週間を過ごしたのだが、今でもその生徒たちのことは忘れることができない。…中略…五中実習で一番悩むことが多いのがやはり生徒との関わりについてのことなのである。当然のことながら、学校の主役は児童・生徒で、中学校では生徒のために学校がある。私たちが目ざす教員という仕事も、子どものためにあると私は考えている。そして、その子どもたち自身と直接関わるのが、意外にも難しいのだ。個性あふれる生徒たちの特性をいかに早くつかんで、いかに的確に関わるのか。その中でも、いかに自分自身の個性や立場を出せるか。そのことに新しい生徒と出会うたびに悩み、悩むたびに自分自身が成長させてもらっていることに気付かされる。またそれだけでなく、生徒の優しさや思いやりに触れるたびに、私自身が慰められることもあった。子どもたちの優しさに触れ、子どもたちとの関わりの中で学び、この新座五中で一番私を成長させてくれたのは生徒たちかもしれない、と今改めて感じている。優しい生徒たちはなぜ優しい生徒たちでいられるのか。そこには様々な要因があるのだろうが、先生の影響が大変に大きいということに気付けたのも大きな収穫であった。もちろん、これも一回の実習では気付けなかったことである。始めは子どもたちや、先生の動きでも表面的なところまでしか目に付かなかったのだが、実習の回を重ねるにつれ、多くの先生方の思いや仕事が見えていくようになったのだ。生徒と同じように、先

た。(6)

生にも色んな人がいる。三学年、全てのクラスを見て回れば、担任の先生の色が顕著に表れており、一つとして同じクラスはない。それでも、全ての先生方が生徒のことを、学校のことを思いながら動いていらつしやり、互いにコミュニケーションを取りながら協力して学校を作っているのである。その姿を見て、自分ならどのような教師になり、どのようなクラスを作り、どのような学校を作り、どのような子どもを育てていくのか、多くのことを考えることができた。また、先生方は私たち後進の育成のために、惜しみなくご指導を下された。先生自身の考えや思い、生徒についても話せることは何でも話してくださった。そうして私が得た学びも、最終的には私が受け持つ子どもに帰っていくのだと考えると、ここで学んだ全てを無駄にはできないという責任感でいっぱいになる。五中で出会った先生方と同様、私もしっかりと芯の通った、個性的で柔軟な生徒思いの教師になりたいと強く思う。…中略…これまで私は、学校というのは子どもたちと教師が作っているものだとばかり思っていた。しかし、それは一つの側面でしかなく、実際の学校（特に良い学校）というのは、多くの人たちの手で支えられているということが分かり、その人たちとの出会いを大切にすることも学んだ。学生という立場にも関わらず、実習で事務さんや用務員さん、給食員さんなどの職員の先生方や、保護者のみなさんと出会えたこと、関われたことは非常に幸運だったと思っている。そういった人たちの支えの中で子どもたちは育てられているのだと考えると、教師として、様々な人たちといかに関わっていくかということも、大切な資質の一つだと痛感し

この学生がまとめているように、体験実習における学びの現実の最も根本的な部分には、子どものための場である学校において、学生自身にも参加させてくれて子どものための試行錯誤をさせてくれたうえに、それがうまくいくように生かしてもらったことで生まれる、「子どもにとつてどうすることが一番大切なのかを問いつつ、その実現の道を探りながらともに協力して切り開いていく場としての学校」という確かなヴィジョンを見ることができる。そしてそれは、大事な部分を引き受けて学生の意欲に応えてくれる先輩としての教師に助けられ、そしてそのことが実感できて初めて、経験できる類のものである。では、以上に見てきたような、体験実習における学習の内実について、その質を支えるものは一体何なのであろうか。そこで、大学、学生、受け入れ校それぞれの側から、そのための必要な条件についてまとめてみたい。

第三章 体験実習における学習の質を支えるもの

第一節 大学教員にできること

言うまでもなく、この体験実習全般における責任の主体は、その実習を企画し実行している大学教員にある。けれども、その実を上げるためには、学生の側にしかるべき自覚と決断が必要であり、また、受け入れ側の学校とも、しかるべき認識をもって学生を迎えてくれるように連携をとる必要がある。そこで、学生には早くから、具体的には一年次前期の教職入門において、

次のような認識を伝えている。

大学における学習は、高度に専門化していくものであるが、それはこれまでのような受身の姿勢で身につける類のものではない。世界を担っていく一人一人の大人としての自分を作っていくための学習なのである。教職を目ざす大学生も同様である。特に教育の世界では、それまでは「お客」であつた立場から、それを担う立場に転換して自己を形成して行かなければならない。そこで、教職入門の課題は、この、根本的向き変えとしての「脱お客」である。けれども、この向き変えは、それまで与えられた「正解」という形とは別に、自分の納得や責任において理解し行動するという経験があまり持てなかつた者にとつては、実際にはかなりの試行錯誤を覚悟しなければならない。まして教育の世界は社会の流行や反対に古い習慣に流されやすいところでもある。

ところで、日本社会においては、無駄なトラブルをなくし、おそらくはお互いの身を守る必要から生まれた慣習的な行動様式に基づく関わりである「世間」というものがあるが、「世間」は、日本社会においてはどの「世界」に入るに当つても通過しなければならないフィルター、または跳び越えなければならぬハードルのようなものとなっている。「世間」にはそれぞれ一定の振舞い方（マナー）があることが多く、それが一見「正解」ともとれるので、どうしても「お客」として自分を位置づけてしまうことが多くなりやすい。それが身に付いて習慣化されてしまうと、どうしてもその先にある「世界」に出会いそれを担うこととは無縁になってしまう。せいぜい「いい人」にな

れるくらいである。けれどもそれは、教職を志す学生の本望ではあるまい。

そこで、教育という「世界」の最深部、教員社会にも存在する「世間」の向こう側で、子どもにとつてどうすることが一番大切なのかを子どもとともに探りながらその実現の道を切り開こうと実際に格闘している人間と出会うことが必要である。彼らが実際どのような「世界」を支えているのかを見ることができるためには、まずそこにある「世間」の厚い層を跳び越えるとともに、その向こうの「世界」に応えてもらえるための「自分」を、勇気を持つて発信しなければならない。それはちょうど、それまで思いもよらなかつた法則が、勇気を持つて失敗と思われたものをあえて見直したところから発見され、それによつてそれ以前の「世界」との関わり方が根本的に変わつてしまふことになつたという科学的な諸発見の歴史のように、教育の「世界」もそのような研究的精神によつて支えられ、次代に受け継がれていくものである。そこに必要なのは「失敗にあえて立ち向かう勇気」「失敗する勇気」である。我々大学のスタッフは、誰であれ、そのような勇気には高い敬意を払うものであつて、それは我々自身が、それぞれの研究領域で常にそのような「失敗する勇気」を発揮し得たからこそ今日この場に

いるからであり、また、大学で学ぶ意味も、そのような学び方を自分のものとする

ことで、それぞれが目ざす「世界」と本来の意味で出会い、それをともに支えて行けるような根本的な教養を獲得するためにあるのである。

大体以上のような一つのメッセージを伝えるのであるが、年

度によつては、我々スタッフの中から数人に「失敗する勇氣」ということについて、自分の経験を例に話してもらふこともあつた。

さて、教職入門は必修科目であるから、実際には様々な学生がいる。中には教職に対して強い動機を持っていない者もいる。けれども、学生の志望は流動的なことが多く、誰であつてもその中から何かが得られる、ある種の普遍的な経験として捉えなおせるよう、また、教職に進むにしても、「即戦力」などという一時の評価を得るためだけでなく、その「世界」を担つていく人材として将来にわたつて大切な何かをつかんでほしいという目的があるので、自分の手で払いのけなければならぬ火の粉をあえて振り掛けるような言い方をしてきた。けれども、はじめに述べたように、大抵の学校現場ではそのような学生は却つて敬遠されてしまいがちなので、学生の実態とこの授業の意図を理解して引き受けてくれる学校を探し出し、連携をとることが必要であつた。そこで、新座第五中学校の坂口智教諭にお願いし、緊密な連携の下、それを実行することとしたのである。

受け入れに當つて坂口教諭が示した認識は、大学生が来てくれることで中学生たちに教育上とても良い効果が見込まれるから、言い換えると、それが子どもにとって非常に良いことだと考えられるので引き受けるのであつて、第一義的には、大学生をそのために活かしたい、ということであつた。それは、直接的には大学生のためではないのであつて、もし彼らにためになるとしたら、それはかれらが本当に子どものためになることを望んでおり、それがどのようなことなのかを知りたい時である、

ということであつた。そうして言い添えるには、そこをはつきりさせておかないと、学校現場ではすぐ厄介者として排除されてしまひやすい、なぜならそんな者に手をかけている暇などないはずだという論理と、反対に自分達が楽になるために学生は使うものだという暗黙の了解があるので、都合が悪くなるとすぐにマイナスのレッテルを貼つて遠ざけてしまいがちだからというのである。そこで、引き受けてくれる学校には、どんな形であれ、子どものために役立ちたいと意欲してやつて来る学生を教育のために活かして手応えを感じさせるための力をつけることを、ますます多くのマンパワーの導入を必要とするこれらの学校を支える教員にとつて必要な資質として位置づけ、自分たちに必要な研修の一環として取り組んでもらうことをお願いすることが必要だということになった。とはいつても、この認識は「世間」的に言うと、学生がお世話になる学校に対して大学側からなかなか言える性質のものではないので、このことを伝えることができた学校は多くない。けれども、坂口教諭のこの卓見は、我々がその後交渉して実現したある別の学校で出会つた典型的なまでの失敗事例を見事に言い当てることにもなつたのである。このことについては、時期が来たら報告することとしたい。因みに、この認識を理解し、引き受けていたのは、新座第五中学校の坂口智教諭(当時)の他は、江東区立東砂小学校の永岡幸夫校長先生(当時)だけである。東砂小学校の実習については、また別に紹介する必要があると考えている。

以上のことから、体験実習における学習の質を支える一つの

要因として、最終的な責任を引き受けるものとしての大学側ができることは、学生と学校側に対して、明確にその意図を伝えるということであると言いうことができるであろう。

第二節 学生にできること

報告書を見る限り、学生たちは、一人一人が自分なりにメッセージを受け止め、課題に立ち向かっているようである。その意味では、学生にできることは、この機会に精一杯自分を発揮してもらって、何かをつかみ、また、何かに出会ってくれることであるということが出来る。その際、なるべく自分にとって失敗であったり、限界を感じる経験をしてもらいたいと思っていた。坂口教諭との連絡の中で、このような失敗感とそれに伴うある種の手応えにどう向き合ってもらおうかということは、折に触れて話題になっており、坂口教諭は、それがいかに貴重なものでありそれを例えはどう活かすことができるのかを、それぞれの学生に寄り添って一緒に道を探ってくれたようである。その姿の一端は、学生等を通じて大学の教員にも伝わってきた。そして、その様な回り道を経て得られた経験こそが、自分にとって意味のある学習に繋がっていたと言いうことが出来るであろう。

その意味で、大学側のメッセージと受け入れ側の誠意を信じて自分から飛び込んで試行錯誤して行った事それ自体が、学生にとって体験実習における学習の質を支えていた大きな要因であるかとめることができるであろう。そしてそのことは、我々大学人（や受け入れ側の学校）が、決して裏切ってはならない

ものであるということは、ここで改めて確認するまでもないだろう。本来、学生からのこのような信託は、最初ではなく最後に受けてしかるべきものだからである。

第三節 協力校の教員にできること

学生の意欲や能力に関わらず、体験実習における学習が学生の何かを変えるような出会いになるためには、本当の意味で、教育の「世界」と出会うことが必要である。学生の話や報告書からは、そのような決定的な出会いが起るためには、協力してくれる学校の教員の、引き受けるに当たっての関わりのあり方が、大きく影響していることが分かる。

新座五中に行っていた学生の報告や戸田との打ち合わせの内容から、坂口教諭がよく「学生達は我々教員が手を抜くために来ているのではない」と憤っている様子や、何かのきっかけでマイナスのレッテルを貼られてしまった学生や何とかして色々な教員から学びたいと希望する学生のための相談に付き合っている姿、そして、子どもに対するのと同じように、様々な人と連携しながら、彼ら学生にとって自分のやっていることが、彼らにとってどういう意味を持つのかを問いながら、その実現の道を探りつつ一緒に切り開いている姿が、折に触れて大学側には伝わって来ていた。ある時、夜九時ごろ戸田がある連絡のために坂口教諭の携帯に電話したところ、まだ、その日問題に直面したある実習生のことで学生たちとのミーティングの最中であつた。

そのような日々の姿を通して坂口教諭が伝えていたことは、

子どものために全てが成り立っているという、教育の「世界」の普遍的な構成原理であったと考えることができるであろう。その目的の前では、誰もが対等であり、ともに力を合わせる仲間なのである。そして、その中で自分がどのような身のこなしで、子どもにとってどうすることが大切なことなのかを問いつつ、その道を切り開いているのか、別の言い方をすれば、その時々の子どもの状態を探りながら、そしてその望ましい姿を探りながら、一回限りの足場をその都度架け替え続けているという姿、を見せることは、子どもにとってどうすることが一番大切なことなのかを追求するという高い目的の存在が理解されなければ、学生にはまったくの無駄骨か、せいぜいのところ自分のための点数稼ぎとしか映らないであろう。けれども、それが高い目的の元になされていることが見えてきたとき、その一回きりの足場の意味と、自分なりの足場のかけ方を模索する目当てとを、同時につかむことができるのである。

報告書からは、学生がそのようにして自分なりのやり方を工夫していく目当てをつかんだ例を多く見ることができる。以上のことから、体験実習における学習の質を支えるための協力の校の教員ができることこそが、実は決定的なものであることがわかる。大学も学生も、それに出会えるための構えや姿勢を作ればいいわけであるが、引き受ける側の教員は、彼らを教育という「世界」に出会わせながらそれを一緒に支え、その苦勞と喜びをともにするという、いわば中身を作らなければならないからである。その苦勞を支えるものは、その「世界」の将来を担おうとする後輩に対する単なる期待にとどまらない深い共感

と、おそらくは尊敬の念であろう。そしてそれも全て「子どものため」なのである。「学生達は我々教員が手を抜くために来ているのではない」という言葉は、そのことを端的に表したものであるとして理解することができるのである。

〔注〕

- (1) 『小・中学校参加体験実習報告書Ⅵ』、平成十七年四月、埼玉大学教育学部（国語科指導法）、九三頁
- (2) 『中学校参加体験実習報告書Ⅰ』、平成十四年十月、埼玉大学教育学部（国語科教育法B）、二六頁
- (3) 前掲書（1）、一〇〇～一〇一頁
- (4) 前掲書（2）、三二頁
- (5) 同書、一一頁
- (6) 前掲書（1）、八六～八七頁

〔謝辞〕

本論文は、体験実習の成果に基づいて執筆されたものです。体験実習の実現においては、多くの方々のご協力を頂きました。また、新座市教育委員会の坂口智先生には、この企画の立ち上げの段階から携わって頂き、その後も継続して学生達のために特に力を尽くして頂きました。ここに感謝申し上げます。